

<新刊紹介>北原文雄創作集 『田植え舞』

南雲, 道雄 / ナグモ, ミチオ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

194

(終了ページ / End Page)

194

(発行年 / Year)

1994-07-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019783>

北原文雄創作集
『田植え舞』

南 雲 道 雄

昨今の自然破壊や環境問題、米を中心とする食糧問題を含め、農業、農民への関心は深まっている気配だが、職業作家によって農民や農村の現実が描かれる例は皆無にひとしい。これは、いわゆる作家の怠慢もあるうけれども、農民の置かれている状況、農山村、農業の諸相が複雑になっていて捉えにくくなっていることを示す。その意味で、このたび刊行された北原文雄の創作集『田植え舞』は、異色といえるし、充実した創作集である。

表題作のほか五篇の短篇から構成されているが、表題作が一等の力作。作者の居住する兵庫県淡路島の農村を舞台に、目下この国の農民が直面しているさまざまな問題に真正面から挑んでいる。

「田植え舞」は、島の集落の農家が田植え

の前、田圃の用水路や農道の手入れを共同で実施する状況から書き起こされ、まずこの共同作業にきしみが生じている現実が提出される。水路も農道も共同利用されるのだから共同でやるのは当然なのだが、この共同作業に象徴される農村共同体、あるいは相互扶助の仕組みが崩れるということ、それは、これまでの、互いに支えあってきた農村社会の内部崩壊の進行を意味しよう。

共同作業終了後の慰労会の様子が本篇の核心。集まっている人たちの多くは六十代後半から七十代、年配の女性も何人かいるが、殆ど兼業農家。酒を汲み交わしながらの会話が巧み。それぞれの農家の抱えている個人的事情に始まり、減反政策、食管制度、後継者問題、環境破壊の問題その他の現実があぶり出される仕掛け。ふだんは表情の乏しい農民も酒の席となると能弁になって本音が出る。この点に着目して作品を組み立てているところ、日常的に彼らの生活の实质と向き合っている土着の作家の面目踊如といえようか。

最後は、かつて田植えの季節に村の少女らが早乙女姿で舞い、田の神に奉納したという「御田植え舞」を、ほろ酔い気分の寡婦が腰をくねらせて舞い、周囲の人たちが手拍子を

打つ。この踊りの様子が何ともおかしく、そしてわびしい。表題はこの踊りから採られているわけだが、古きよき農村社会というべきか、その亡びの哀歎がにじんで見事。

淡路島の農家の田は平均六十アール余（六反歩）、毎年強制される生産調整、つまり減反で、稲作だけでは立ちゆかぬ現実と生き方を模索した「六反百姓」、産地直送の野菜農家の努力と奮闘に照明を当てた「丹南のひかり」。「弥陀の海」では、島の北部の丘陵地帯で、二十代の若い夫婦を中心に、三代家族が健在で六十頭の牛を飼育する酪農一家の生き方が描かれている。

このほか「春風に乗って」「紀州へ」が収められているが、どの作もデテールが精細で、作者の真摯な姿勢に好感が持てるし、何よりも切実な情熱が伝わってくる。この情熱のありようというか、切実な表現は、こと淡路島にとどまらず、この国の農民の運命、状況を照らし出す力を持つ。一読を勧めたい。

（なぐも みちお・一九五七年卒）

▽一九九四・二 編集工房ノア（大阪市北区
中津三の十七の五）刊 B6 一八〇〇円
▽著者 一九七一年卒